



教職員支援グループ（教育情報）より

情報モラルは、学校・家庭・地域の連携で

子どもたちへの情報モラル教育の必要性は、インターネットの利用拡大によるネット依存や、SNSでのトラブルなどから、だれもが実感しているところかと思えます。しかし、子どもたちへの指導だけでは十分とは言えません。子どもたちの一番身近な存在である保護者の方への啓発も行っていくことが大切です。

そこで、教育総合研究所では、学校などの依頼を受けて「子どもたちをネット社会の加害者・被害者にさせない」をキーワードに、保護者や地域の方を対象とした情報モラル講話を行っています。



<講話で大切にしていること>

(1) 情報を伝える

講話では、情報モラルに関する様々なデータを紹介します。

県や学校の携帯電話や通信型ゲーム機の所持率であったり、インターネット利用率や利用内容の割合など、最新の数値を伝えています。ちなみに、内閣府の調査によると平成28年度のインターネットの利用率は、小学生で61.8%、中学生は82.5%で、その割合は年々増加しています。

また、情報機器によるトラブルや事件についても伝えています。具体的な事例を紹介する中で、間違った使い方をすることでトラブルに巻き込まれるということを理解します。

(2) 話し合う場を位置付ける

講話では、単に情報を知ることだけでなく、話し合う場を設けることで、考えることを大切にしています。受講者に合わせて、以下ような内容を位置付けています。

①事例を基にしてインターネットの特性を理解する

Aさんがサッカーの練習でミスして転んでいる写真を、Bさんは偶然スマホで撮影しました。Bさんはおもしろいだろうと友達のCさんにその写真を送りました。Cさんもおもしろいからと他の数人に写真を送りました。このあとどうなるでしょう。

上記のような事例を基に話し合うことで、インターネットの特性（即時性や広域性、一度ネットに載せた情報は消せないということ）を理解します。

②動画を視聴し、トラブルの原因を見付ける

インターネットでのトラブル事例を分かりやすく表した動画を見て、トラブルに遭わないためにはどうすればよかったのかを考えます。

③我が家のルールを決める

講話の最後には、子どもたちが安全に正しく情報機器を活用するために、家庭ではどんな約束が必要なのかを考えます。

学校では、「情報モラルウィーク」や「道徳・特別活動等での情報モラルの指導」を行うことで、子どもたちの情報モラルを高めていただいています。今後、情報技術がさらに発展する中で、子どもたちが正しく判断したり、情報機器を有効に使ったりすることができるよう、家庭・学校・地域の連携を図っていききたいものです。



児童生徒支援グループ（教育相談）より

不登校のなぜ？

子どもが「学校に行きたくない」と訴えれば、反射的に「なぜ？」と問い返したくなるものです。

「そう。行きたくないの。」と受け止めたとして、次に出てくるのは、「何か（嫌なことが）あったの？」という言葉ではないでしょうか。

ある書籍に、「…多くは、自分たちが子どもを見ていない時間、知らない時間に不登校の原因があると思っています。本人ではなく、周りの接し方に問題があるのではないかと思っています。」という記述がありました。

不登校に関わる相談を受けていると、「友達に〇〇されて…」 「先生が〇〇してくれないので…」ということは多くあり、実際にそれらがきっかけで不登校になったと考えられることもあります。しかし、相談を進めていくと、子ども自身の力不足が根本にあるのではないかと思われることが多いです。

例えば、**体力**であったり、**学力**であったり、**コミュニケーション能力**であったり…。

体力が不足している子どもは、疲れやすく学校に行くだけでヘトヘトになってしまいます。勉強にも集中できず、運動するとなるとかなりのエネルギーを消耗します。疲れているときに、友達などにあれこれ言われると腹が立つとなってしまいます。

学力が不足している子どもは、勉強が難しいし、分からないから教室にいるのが苦痛です。時間内にはできないし、「そんなことも知らないの？」と友達にバカにされているように感じます。そして勉強ができない自分は尊敬されていないし、みんなに意見を聞いてもらえないとってしまいます。

コミュニケーション能力が不足している子どもは、人と一緒にいると疲れるため一人でいたいけど、ずっと一人ぼっちは寂しいから友達に寄っていきます。でも、思ったように友達は反応しないため、どうして意思が伝わらないの？何を話したらいいかわからないとなってしまいます。

子ども自身が、これらの力を身に付けられるようにしていかなくては、根本的に解決はしないということについて、多くの方に納得していただけたと思います。

《教育総合研究所にかかわる11・12月の行事》

11月17日（金） 中堅層教員研修会
教育相談研修会
11月29日（水） 第2回各種教育研究会

12月13日（水） 第3回研究指導員会
※第3回これから研修 各校にて実施（11・12月中）

不登校の解決に向けて

最近の対応は「あわてないで、自分のペースでゆっくり」というのんびりスタイルが多く見られます。しかし、社会に出た時のことを考えると、ゆっくり過ごしたことが弊害となることもあります。ですから、「焦らず急げ」といったところが妥当です。

これまで様々な場で、

「できることから、やっていきましょう。」

「どこまで続くかは、やってみないと分かりません。」

「うまくいく方法を探して、やり方を変えてみましょう。」

と伝えてきましたが、それらを考えるためのポイントを改めて確認したいと思います。

①原因の見極め

前述の力不足のことも踏まえて、判断していきたいです。幾つかのことが複雑に絡み合っていることも多いですが、どんな力を付けていくとよいかを考えたいです。

②子どもに適した（実行可能な）方法

「こうすればうまくいく」という万能な方法はありませんが、子どもの能力に合わせた方法が必要です。ただし、子どもに「どうする？」と尋ねてその通りにするだけや「自分のことだから自分で決めなさい。」だけでは、なかなか前進しないことが多いです。

「不登校の問題は、どんなにやさしい言葉をかけてもらっても、励ましてもらっても、言葉だけではおられない。行動が変わらない限り決して解決しない。」と言われることもあります。実行可能な方法を考えたいです。

③サポート方法の見直し

いつになっても変わらない場合は、サポートの方法を思い切って見直すことが大切です。

不登校の子どもたちはコミュニケーションが苦手だから、相手の気持ちが分からないとか言われますが、使っている言葉の意味そのものが分かっていないと感じることがあります。また、自分の思いを正しく説明することが苦手で、相手に真意が伝わらずに誤解が生じることもあります。「こういう時にどう表現したらよいか」を身に付けさせるスキルトレーニングも重要です。

参考文献

小林高子 「不登校になったら最初に読む本」(クロスメディア・マーケティング)